

要旨：ドイツ観念論の現代的合理性 v. 1.3.

第15回ドイツ観念論研究会・実存思想協会合同研究会（2006/9/30）

[このレポートは、『ドイツ観念論の現代的合理性』<http://ntaki.net/di/7q/int.pdf>の要旨です]。

① 表題の意味

ドイツ観念論…フィヒテ・シェリング・ヘーゲルの3人——共通の思想基盤。
現代的合理性…哲学に関心がある人であれば、納得できるような説明を目ざす。
それがドイツ観念論の偉大さ（歴史的意義ではなく）の説明にもなりえるのでは。

② 3人の思想の共通点

- ・フィヒテ：「自我はみずからを措定する」。
 - ・シェリング：「絶対者とは、自己の外へ出て行くという永遠の行為である」*1。
 - ・ヘーゲル：「実体は主体である」。
- ↓
- ・全実在性をもつもの（自我*2、絶対者、実体など）が自らを多重化することによって、その実在性は現実化される。その多重化は、またもとの一つに戻る——という考え。
→これはどういう事態なのか？

③ 全実在性をもつもの（世界A）の特性

- ・絶対者とは、「主観的なものでもなければ客観的なものでもなく、ある哲学者の思惟でもなければ、誰かの思惟でもない、それはまさに絶対的思惟である」（シェリング*3）
→「共同主観性」（廣松渉）のようなものが、成立している。
- ・世界Aそのものとしては経験に直接表れない。*4
- ・世界AはB, C, …と多重化（自己措定、外化）することによって現実性を得る。あるいは、Aとは多重化そのものである。*5
- ・Aのみ、あるいはB, C, …のみでは、真に存在しえない。
したがって全実在性をもつAは、近代的自我（実体的コギト）を拡大したいわゆる「観念論」ではない。
→分かりやすいモデルが必要。

④ <世界の多重化・帰一化 ≡ メタ言語>モデル

i) 日本語総体A'

- ・共同主観的な形象で、言語的意味すべてをもつ（日本人にとっては）。
- ・存在はするが、そのものは現前しない。発話されたB' 「雨が降る」、C' 「熱い！」は、日本語の一部あるいは一例。

また、単語や文法規則を網羅しても、それは単語や文法の表れであって、日本語そのものの表れではない。

- ・発話 B' , C' , …が一切なければ、日本語総体 A' も存在しない。
- ・日本語総体 A' というものがなければ、発話 B' 「雨が降る」は、言葉ではなく音にすぎない。
- ・以上から、「日本語総体 A' 」と「世界 A」は類比的である。

ii) メタ言語 …言語について語る言語。例：「英語では、目的語は動詞の後にくる」

* ここでは、同一言語のみを考える。例：B'' 「日本語では、目的語は動詞の前にくる」

iii) この自己言及的な日本語 B'' は、もとの日本語総体 A' とは次元が違う一応「別物」。

→まったく同じ日本語とすれば、「あるクレタ島人いわく、『クレタ島人はみな嘘つきだ』」のパラドックスが生じてしまう。

iv) 上記のメタ言語 B'' は日本語総体 A' から生じ、A' に対しての …A' の「外化」、「für sich」。

メタ言語 B'' はやはり日本語なので、はじめて発話されたときには、日本語総体 A' の内容はより豊かになっている。そして、もとの日本語総体 A' にやはり帰属する…「in sich reflektieren」。

上記より、「世界の多重化・帰一化」は、「メタ言語」と類比的。

⑤ ドイツ観念論＝メタ世界論

・メタ言語のメタの意味で、ドイツ観念論の「多重化」「帰一化」は、メタ世界 Metakosmos のあり方を表している。ただし、

1) 論理的には、<メタ世界→意識(共同主観性)のメタ化→メタ言語の存在>の順。

2) 言語本来のあり方は、言語外のものを意味する「対象言語」…例：「雨が降る」しかし、ドイツ観念論においては、自我(絶対者)以外には存在しないので、その多重化(言語でいえば発話)はつねにメタ的になる。

⑥ 3人の相違点

- ・自我／絶対者／主体＝実体は、すべて全実在性を有するので、「主観的／客観的／絶対的観念論」といった観点は、適切さに欠ける。
- ・3人それぞれのメタ化の仕方が違っている。

フィヒテ

個別者 B, C, …は、全実在性をもつ(＝全体者) A から直接生じる。

B, C, …のどれかは生じているが、どれも同じく生じえる可能性をもっている*6

シェリング

全体者 A 自体の中に絶対的な対置 Entgegensetzung があり、そのため B, C, …を産出する運動が可能。*7

しかし直接的には、B→C→D と、個別者から個別者へ継続的に*8 生じる。つまり、B, C, …の各「産物はふたたび諸産物へと分解」する。*9

出発点と終局点は同じになる。*10

ヘーゲル

B→C→…A→B と円環状に、また必然的に進行するのは、B, C, …それぞれの個別者が持つ自己矛盾による。(B, C, …は、『精神の現象学』や『論理学』などの各段階)。

ただし、フィヒテ・シェリングの場合と同じく、個別者は全体者 A から、存在性を与えられている。

また、自己矛盾といっても、各個別的契機と全体的契機との矛盾。

⑦ 「運動」＝存在自体の方向性（ベクトル）

- ・ 3者ともに、全体者の自己措定（メタ化運動）。
- ・ そして問題は：「实在性[＝全体性]の[措定する]主観と[措定された]客観への分割は、主観と客観の両項の間に浮動する第3項、すなわち自我の活動によらずしては、まったく不可能である。そしてこの第3項はといえば、2つの対置する両項自体が自我の活動でなければ、不可能なのである」。^{*11}（シェリング）
- ・ このことは、項に先立つ自我の活動[メタ化運動]の第一次性 a la Hiromatsuを表す。この「活動」あるいは3人の「運動」は、時間・空間における物理的・心理的なものではない^{*12}。存在そのものないし概念のベクトル的なあり方を、方向性を示す。
→これをどう規定していくかが課題。

⑧ フィヒテ登場の背景

- ・ シュルツェの『アイネシデモス』（1792年）
カント：「因果関係のカテゴリーは、経験の対象にのみ、適用できる。」
しかし、カント自身がこのカテゴリーを、経験の対象ではない、
物自体としての心に適用→アプリアリな総合判断。
物自体に適用→認識の素材としての表象。
因果関係を、経験の対象にしか適用できなければ、
「A（経験外に存して、原因となる）→ B（結果である経験的对象）」の構図が使えない。
「A → A（あるいはA'）」の構図にならざるをえない。
- ・ マイモンが、「純粹理性批判」の読み替えによって、いわゆる意識の能動的一元論を提示していた。それがフィヒテの自我概念の成立にヒントとなった。
- ・ ドイツ観念論は、哲学史の1つのエピソードといったものではなく、必然的な形で生じている。

* 廣松哲学とメタ世界の関係

- ・ メタ世界の共時的な synchronique 構造が（あるいはメタ世界を平面に投射したものが）、「関係の第一次性」「四肢的構造」。

注

- *1 『自然哲学論考』序文への1803年の付記 (Schröter 版 *Schellings Werke*, I, S. 713)
- *2 「自我には、実在性の絶対的な総体が帰属する」(フィヒテ『全知識学の基礎』、SW版 *Sämtliche Werke*, I, S. 129)
- *3 『自然哲学論考』序文への1803年の付記 (Schröter 版 *Schellings Werke*, I, S. 711)
- *4 シェリングによれば、「絶対的 [= 措定する] 自我は、決して対象とはなりえない」(『哲学の原理としての自我について』(1795年)、Schröter 版 *Schellings Werke*, I, S. 91)
- *5 フィヒテ: 「自己措定と [自我の] 存在とは、まったく同じである」。(『全知識学の基礎』、SW版 *Sämtliche Werke*, I, S. 98)
- *6 『幸いなる生への導き』第5講の5つの世界を参照。
- *7 『先験的観念論の体系』(1800年)、オリジナル版、S. 90.
- *8 in Kontinuität, Evolution, Sukzession などの語が使われている。(『自然哲学の体系の最初の構想』Schröter 版 *Schellings Werke*, II, S. 15)
- *9 *ibid.*, S. 5.
- *10 『先験的観念論の体系』、オリジナル版、S. 81.
- *11 *ibid.*, S. 91.
- *12 「[自我の] 活動の概念においては…すべての時間的諸条件のみならず、活動のすべての諸対象も捨象されねばならない。」(フィヒテ『全知識学の基礎』、SW版, I, S. 134)